

詠む広場

毎日俳壇

片山由美子 選

探梅やぬかるみに足とられつ

東京 小栗しづゑ

△評▽春の観梅との違いがよくわかる。山中や田舎道をいとわず、まだ寒いうちから咲きたす梅を求めて歩くのが探梅。

父の撮る成人の日の晴れ姿

羽生市 今成 公江

△評▽娘の振り袖姿をカメラに収めようと張り切る父。見違えるほどの美しさがまぶしくて。切れ味の悪き鉈やよなぐもり

葛城市 山本 啓

いちばやく銀をちりばめ猫柳

越谷市 安居院平樹

金蘭の影の上なる浮寝鳥

和歌山 神野 一馬

日脚伸びゆるゆる開くジャズミン茶

加古川市 伏見 昌子

春の風邪妻にうつして治りけり

つくば市 小林 浦波

立春や野菜サラダを大盛に

川越市 大野有之介

もう六時いやまだ六時寒の明

中間市 升水恵美子

うぐひすや竹林に風乾く音

浜松市 野畑 明子

小川 軽舟 選

熱燗や亡き友一人また一人

横浜市 瀬古 修治

△評▽酔いが回ると親しかった友が現れた。死んだはずだがと思うとまた一人。あの世との境が次第にあいまいになる。

湯豆腐の嵯峨野は雨に暮れにけり

藤沢市 青木 敏行

△評▽目当ての湯豆腐屋を訪ねる。あいにくの雨も湯豆腐で温まるにはおあつらえ向きだ。カップ麺する夜勤に除夜の鐘

仙台市 鎌田 傑

凍星や靴音ひびく石畳

千葉市 高橋 信子

警策のひびく古刹や雪深し

伊賀市 福沢 義男

せせらぎの音に力や春近し

普通寺市 合田 豊

立春の瓦礫の中のスマホかな

鈴鹿市 松井 政典

人生に続編はなし毛糸編む

香取市 杉浦 正子

冬菊や父がつかひし帽子掛け

東京 浦上 天守

初段に朝日の温み初雀

大阪市 余田 酒梨

西村 和子 選

病室の夫のひとこと梅ふふむ

広島市 藤井 茂子

△評▽何気ない一言が、句に結晶したことで忘れられない言葉となった。春の兆しを感じたことを季節が語っている。

陽の射して岬かぐはし野水仙

奈良 高尾山 昭

△評▽「かぐはし」という言葉が嗅覚のみならず、視覚をも表現することを思い出させる。バツハ聴きながら句作や冬深し

東久留米市 夏目あたる

内覧の部屋から望む冬夕焼

国立市 佐藤 建

程々に己を赦し玉子酒

福津市 瀧 あき子

寒北斗余生も長くなりけり

西東京市 岡崎 実

冬の目を沈め刃物のごとき海

山形 佐藤美和緒

寒晴や沖に二隻のトロール船

延岡市 九鬼 勉

一条を残して滝の凍てけり

我孫子市 桑原真喜子

絵が染しきみが手製の新曆

常陸大宮市 笹沼 實

井上 康明 選

まんさくや少女の混じる草野球

平塚市 日下 光代

△評▽まんさくは早春、黄色くちぢれた花を咲かせる。その頃草野球が始まり、少年に混じって少女は生き生きと白球を追う。

公魚を釣り上げ光もろともに

加古川市 伏見 昌子

△評▽公魚は春の季語。ワカサギがすむ湖水では、明るい陽光もろともワカサギが釣り上げられる。芽柳を遊ぶかに風止まず

横浜市 斎藤 山葉

凍星や十五少年漂流記

浦安市 上村美川喜

氷らざるところのありて氷りをり

川崎市 折戸 洋

兄弟の大きき競ふしやぼん玉

相模原市 はやし 央

春待たず逝きし友なり空見つむ

安曇野市 小坂るり子

廃校に残る黒板菜の花忌

奈良市 上田 秋霜

夕空を残して春の一ツ星

八街市 山本 淑夫

夕野火を帰る人形遣ひかな

東京 山口 治子



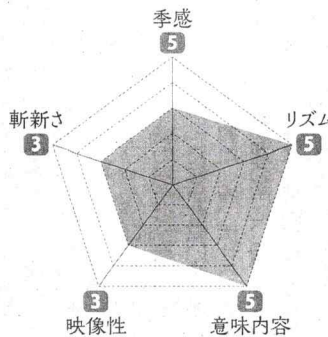
注目的一句

塩見恵介

なぜひとは詩を詠み生きる臘月

第四人称の語り部

チャートで採点



哲学的な一句。「なぜ」という他者への問いかけは、詩に近づき、詩を生み出す基本スタンス。身辺のさまざまな事物に多くを問いかける人が、日常に詩を見いだし、生み出す人も少なくない。

掲句。天空の月と地上の自分との距離ははてしないが、春のおぼろ月のように柔らかな詩の世界の優しさに響く。それゆえ「詠む」「生きる」の二つの動詞があるが、多くの読者は「なぜ人は詩を詠むのか」を考へるだろう。「詠む」ことへの問いは、新たに「読む」ことにも思いをはせさせる。アプリ「俳句でふてふ」の投稿句を3年半楽しく鑑賞させてもらった。ご愛読いただいた皆様にご感謝申し上げます。(次回から俳人の田宮美花さんが担当します)

アプリ 俳句でふてふ

全国景勝地俳句コンテスト 毎日新聞社は富士五湖や耶馬溪など133景勝地にちなんで俳句を募集中。1930(昭和5)年に高浜虚子選で実施した「日本新名勝俳句」の後継企画。選者は俳人の稲畑廣太郎さんと星野高士さん。詳しくはアプリ内の応募要項をご覧ください。



アプリのダウンロードはこちら